

I-1

ヘアカラーの前には パッチテストを忘れずに

髪を染めることは、身だしなみとしての白髪染めだけでなく、ファッションの一部として定着しており、老若男女を問わず広く行われています。毛染めにはヘアカラーと呼ばれる永久染毛剤が使われることが多いのですが、人によってアレルギー性接触皮膚炎を発症することがあり、使用に際しては注意を要します。

ヘアカラーには酸化染料が使われます。酸化染料は毛髪の内部で過酸化水素水などの酸化剤によって酸化されることで発色し、毛髪を芯から染めるので色落ちが少なく長時間色持ちするのが特長です。しかし酸化染料はアレルギー性接触皮膚炎を引き起こしやすい物質でもあるのです。

アレルギー性接触皮膚炎は誰もが発症する訳ではありませんが、それまで一度もかぶれたことがなくても、長期にわたり使用を繰り返すうちに身体の中に抗体ができて、ある日突然発症する可能性があります。これを防ぐには、面倒でも毎回必ず使用前にパッチテスト(アレルギー性試験)を行い、異常がないことを確認した上で使用する必要があります。また、使用によりかゆみや腫れ、刺激などの異常を感じた場合はすぐ

に使用を止めなければなりません。

消費者安全調査委員会の調査では、「カラーリング剤がアレルギー症状を起こす可能性がある」ことを知っている人は6割強いる反面、残りの4割弱は知らないと答えています。また、「パッチテストは知っているが、行ったことはない」とする人が7割強もいて、知っているも面倒なのでやっていないという実態がうかがえます。知らなかったり誤解していたりすれば、正しい行動にはつながりません。まずは、ヘアカラーによるアレルギーについてよく知って、正しい行動に結びつけることで、未然に事故を防ぎましょう。

ヘアカラーによる接触性皮膚炎にはアレルギー性のものと非アレルギー性のものがありますが、どちらも症状は同じで症状だけでは見分けが付きません。見極めは素人には難しく、何らかの異常を感じたら皮膚科に受診するのが一番です。あえて両者の違いを挙げるとすると発症までの時間になります。非アレルギー性の刺激性接触皮膚炎は症状が現れるのが早く、使用した当日のうちに発症することが多いと言われています。これに対しアレルギー性接触皮膚炎は遅延型アレルギーの一種で症状の発現が

遅く、使用の翌日以降に発症することが多いようです。そのため、ヘアカラーが原因と気付かず使用を継続して長年症状に悩み続けるといったこともあります。また、まれにアナフィラキシーと呼ばれる急性のアレルギーを発症することがあります。アナフィラキシーではアレルゲンと接触した後に、極めて短時間に全身に症状が現れます。皮膚の痒み、蕁麻疹、声のかすれ、くしゃみ、喉のかゆみ、息苦しさ、動悸、嘔吐、意識の混濁などで、これらの症状が激しく全身に起こると、頻脈、虚脱状態、意識障害、血圧低下、気管支けいれんなどのショック症状を呈して致死的な経過をたどる場合があります。非常に危険です。

ヘアカラーにありがちな誤解として次のようなものがあります。

- ①症状が軽いので問題ない。
- ②症状が治まるまでは毛染めを控えたので問題ない。
- ③症状がでたら、同じ製品は使わず、メーカーを変えたり、色番号を変えたりすれば問題ない。
- ④自宅で染めずに理美容院で染めるので問題ない。

アレルギー性接触皮膚炎は一度発症したら繰り返します。症状が軽いからとってだまされ使用していると次第に重篤化し、アナフィラキシーを発症する恐れもあります。また、ヘアカラーの染毛成分である酸化染料が原因なので、メーカーや色番号を変えたからといって改善されることはありません。また、毛染め技術の問題ではないので理美容院で染めたからといって発症しないという事はありません。ヘアカラーによる事故を防ぐために、製品の使用上の注意を守り、使用前には必ずパッチテストを実施して問題がないことを確認の上ご使用ください。

